

第3回「こんにちは！市長です」開催概要

開催日：令和6年6月28日（金曜日）17時30分から19時30分

開催場所：三田じばやん倶楽部

参加団体：まかないキッチン（子ども食堂）、まなびあ（学習支援）
（子ども・大学生・スタッフ等合計89名）

主な意見と内容について

1. まなびあ（学習支援）の活動について
2. まかないキッチン（子ども食堂）の活動について

1. まなびあ（学習支援）の活動について<活動をしている大学生などの声>

- ・まなびあは、塾の先生というより、子どもと一緒に答えを考えていこう、という場所。その子の学ぼうとする意欲を引き出してあげたい。
- ・昔から子どもが好きだったが、子どもとあまり関わる事がなかった。サークル活動を通じて、自分のやりたいことをできると思い、この活動に関わっている。
- ・自分の地元にはこういった子どもと大学生が交流できる場所がなかった。勉強以外で大学生と子どもたちに関わりがあることが魅力だし、大人と子どもが程よい距離感だと思う。こういう関係性だからこそ言えることがあったりすると思う。年の離れた大学生だからこそ話せることもあり、それは子どもたちにも良いことだと思う。
- ・子どもたちに寄り添って話をする事を心がけている。今の子どもたちに流行っていることなど聞いてそれについて聞くと、子どもたちから何倍にもなって反応が返ってきて、話が盛り上がる。
- ・子どもの成長は早い。2年経つと、心身ともに成長しているのが分かる。そういった成長を見ると活動していて良かったな、と思う。子どもたちと接するのに、大人としての視点は必要なく、「やってあげている」感は要らない。対等な立場で友達として接し「一緒にやろう」が楽しい。
- ・この場所は、「第3の居場所」感がとても強い。来たら必ず誰かいて喋れるし、これがしたいからここに来る、ではなく、ここに来たら全部楽しい場所。「一緒に行こう」と友達を誘ったりしている。一緒に子ども食堂でご飯が食べられてコミュニケーションもとれて仲良くなれる。
- ・もっと自由に遊べる公園を増やしてほしい。ボール遊びが禁止など様々な制限がある公園が多いので、いろんな遊びがしにくい。
- ・困った時やトラブルがあった時に、話せる大人がいつでもいる施設があればいい。
- ・子どもの居場所、このじばやんのような場所を増やしてほしい。他の地域には少ないと聞く。子ども食堂でなくてもいい。「居場所とは何か」を調べていて、定義として「大人の目がある場所で、子ども同士がコミュニケーションを取れる場所」、他にもいろんな要素があるが、そういう定義を見た。気軽に来て大人に相談できる場所、そういった場所がたくさんあってほしい。

2. まかないキッチン（子ども食堂）の活動について<子ども食堂を主催している支援者の声>

- ・子ども食堂は、毎月最終金曜日に開催している。カレーを固定メニューとしており、プラス一品を、いただいた食材等を見て考えている。
- ・食材については、お米を三田市社会福祉協議会から貰うこともあり、また毎月15キロのお米をくださる農家さんがおり、季節の野菜（玉ねぎ、じゃがいも等）も、デザートブルーベリーも

農家さんからいただいた。今日のメニューのプリンやフライもフードバンク関西からいただいた。マグナムさんも定期的に支援していただき、最近は企業からの寄付も多い。買ったのは、お肉とフルーツ缶くらいで、アイリスオーヤマさんなどから食材をいただくこともあるので、食材には困ってない状況である。工夫をしながらなんとかやっている。できるところは既にやっており、不足する分のスキマは自分たちのネットワークでうめているが、足りない食材は自分の講演の講師代などを足しこんで購入しており、物価高騰もあり、苦しい状況がある。市内の子ども食堂のほとんどについて、食材は充足しているところが多いと思われるが、子ども食堂によって特徴があり、状況やニーズが異なるので、「さんだ子どもまんなかネット（子ども食堂主催者の会）」で、各子ども食堂の状況を聴いてほしい。各地域に子ども食堂は増えつつあり、市内で14～15か所ほどになっている。小学生から大学生、高齢者まで様々な世代が1つ屋根の下に集まりコミュニティを形成している居場所になっているが、収支ギリギリで運営しているところが多いので、例えば寄付しやすい仕組みづくりなど、そういった支援があれば嬉しい。

- ・子ども食堂を楽しくやっているが、子どもが置かれている状況が厳しくなっているのが見えてきている。全般的に支援が必要な子どもが増えている印象がある。子ども食堂に来ている子で、朝早く保護者が家を出て、（スマホやゲームなどで夜更かしをするので）登校時間に起きられなくて学校にいけない子や、給食だけ食べに行く子もいる。ただ、家庭状況に関わらずゲームやスマホは買ってもらえる子が多いので、経済的困窮は、外見からは分かりにくくなっている。中には、食費や習い事の費用は後回しで、親に食事代の500円を渡されて、コンビニで好きな食べ物だけ買って済ませている子もいる。そういった実情は、食事を一緒に食べ関わりを持つ中で、見えてくることがある。ここは、どんな子どもたちでも、誰でも来ることのできる受け皿的な場所にもなっている。
- ・ここでは大学生が子どもの話を何でも聞いてくれるので居心地が良く、また、大学生と遊べるので嬉しい。大学生と交流する機会はとても貴重である。
- ・家庭状況などから、子ども自身が自分の将来の見通しがたたない、どうしたらいいか分からない子がいる。そういう子が、ここで大学生と交流することで、大学生がロールモデル的になり、進路の選択肢など未来を描けるようになる子がいる。
- ・親からお金の教育を受けていないので、お金の価値をあまり分かっていなく、アルバイトして稼いだお金を、使う・貯金するなどがバランス良くやり繰りができない子がいる。そういった基本的なお金の教育はとても大事だと思う。
- ・昔も今も子どもの本質は一緒。だが、子どもが怒られることなく、家庭でもない学校でもない、ひとりにならない第3の居場所が必要である。

主な意見を受けて（市長から）

- ・子どもたちに関わることが楽しい、ということはとても良いことである。
- ・「居場所」という、そういった視点はとても参考になった。
- ・さんだ子どもまんなかネットで、子ども食堂の現状などを聴きながら、支援について考えていきたい。

いただいたご意見・ご提案は今後の市政運営の参考にさせていただきます。